

第10回 下京ビジネス街の旧跡(二)

神明神社と鶴

今回は、第9回の東、第7回の北の地域をめくりましょう。こ
こはビジネス街と商業区域が混在したところです。まず、綾小路
通北側、割烹の出格子東隅に貼ってある町名看板「綾小路通東洞
院東入元恵王子」① から出発しましょう。



綾小路通 東洞院 東入 元恵王子町 ①

町名の「元恵王子町」に含まれる「悪」の字がおどろおどろし
いので、由来を調べました。町名のもとになった恵王寺社の祭神
は素戔嗚尊。「悪」は「強い、強力」という意味で、この場合は
素戔嗚尊の荒魂をあらわすために用いています。「悪王子社之趾」
の石碑が東洞院四条下ル西側にあります。恵王子社は、もともと
この石碑のある場所にあったが、豊臣秀吉の京都改造の際、天正
十八年(一五九〇年)に、烏丸通五条上ル恵王子町(現在もこの
町名が残っています)に移され、さらに慶長元年(一五九六)に



仁丹町名看板の所在(高倉通の四条から高辻まで)

四条通寺町の祇園旅所に移されました。『都名所図会』には、天明
の大火の前の様子が記されており、「悪王子社(祇園)御旅所北
側にあり、祇園會神輿臨幸の時、烏丸通五條の北恵王子町より、
古例によつて神供を備ふ」とあります。天明の大火(一七八八
年)のあと四条通大和大路かどに遷座。明治初めに八坂神社境内
の本殿東に鎮座し、今日に至っています。

町名看板①の並び、東側に神明神社(綾小路通高倉西入ル神
明町)があります。祭神は天照大神。太平洋戦争後、元の豊園
小学校内にあった文字天満宮を合祀。写真にあるように、東側に

「神明神社」の石標。門柱西側に「文字天満宮」の札が掲げてあります。

社殿の傍らに、「神明神社について」と題した由緒書が用意してあります。その由緒書によれば、「神明神社は、近衛天皇（在位一一四一―一一五五）がしばし行幸された摂政関白藤原忠道の屋敷（四條東洞院内裏）にあった鎮守社。創建年代はあきらかではないが、すくなくとも平安時代。宝物として、やじりが二本伝わっており、源頼政が鶴を退治したときに奉納したもの。平安末期から天台宗の護国山立願寺円光院の社僧によって管理されていたが、明治初期の神仏分離によって神社だけが残され、現在は神明町が管理している」とあり、続いて文字天満宮を合祀した経緯が記されています。『都名所図会』には、「神明宮は綾小路高倉の西にあり。祭る所伊勢内外太神宮なり。」と簡単に紹介しています。

本殿前に謡曲史跡保存会による駒札がたっています。要点を尽くしていますので、駒札の説明を次に引用します。

謡曲「鶴」と神明神社

謡曲「鶴」は、古典「平家物語」から取材した曲。鶴とは、頭が猿、尾が蛇、手足が虎、鳴く声は鶴に似た怪獣だったといわれます。芦屋の里で一夜を明かす僧の前につつほ舟（丸木舟）が着く。舟人に尋ねると、近衛天皇の時代、源頼政に討ち取られた鶴の亡霊と名乗り姿を消す。僧が供養していると鶴の姿となった亡霊が再び現れ、供養に感謝し、勝者・頼政の栄光と、つつほ舟で冥



神明神社

土に流されてゆく自分の有様を語るのです。

この神明神社は鶴が退治された屋敷跡とされ、神社にはそのとき頼政から奉納された「やじり」二本が宝物として伝わっています。

「鶴とは、頭が猿、尾が蛇、手足が虎、鳴く声は鶴に似た怪獣」というのは、文としておかしい。平家物語によれば、「五海女とは、云々」とすべきところ。ただし、この怪獣の名前の記されていない異本もあります。このため、後世には、この怪獣をも、鶴と呼ぶことになってしまいます。能の『鶴』でも、「五海女」と

「鶴」とを同一視していますので、この駒札でこのように書いてある気分も、わからないではありません。

ここにでてくる源頼政（一一〇四—一一八〇）は、摂津源氏。保元の乱、平治の乱では、勝者の側。とくに平治の乱のあと、平清盛の信頼もあつく、源氏の長老として参画。それまで四位が最高であったのに、七十四歳で従三位に昇ったので、源三位頼政と呼ばれました。歌人としても有名。

従三位頼政

おもへどもいはで忍ぶのすり衣

心の中にみだれぬるかな

千載和歌集卷第十一・恋歌一・六六三

最晩年に、以仁王とともに、平氏に反旗をひるがえし、三井寺に赴くもままならず、宇治平等院の戦で敗れて自害。平等院で扇を敷いて自害したという伝承は、能『頼政』の題材になっています。

『平家物語』（百二十句本、京都本）巻第三の鶴退治の箇所を、J-TEXTS（日本文学電子図書館 <http://www.j-texts.com/>）から引用しましょう（振りがなは現代かな遣い）。宇治で源頼政が自害したあと、「鶴」と題する回想場面です。引用は長いですが、歌物語としておもしろいので、我慢してください。源頼政は、平忠度に比べて知名度が低いので、約八百年後に、せめてもの手向けです。まずは、頼政の武勇伝。

頼政は、浅葱の狩衣に、滋藤の弓持ちて、これも山鳥の尾にてはぎたるとがり矢二すぢとりそへて、頼みきりたる郎等、遠江の国の住人、猪の早太といふ者に黒母衣

の矢負はせ、ただ一人ぞ具したりける。夜ふけ、人しづまつて、さまざまに世間をうかがひ見るほどに、日ごろ人の言ふにたがはず、東三条の森のかたより、例のひとりむら雲出て来たりて、御殿の上に五丈ばかりぞたなびきたる。雲のうちにあやしき、ものの姿あり。頼政「これを射損ずるものならば、世にあるべき身ともおぼえず。南無婦命頂礼、八幡大菩薩」と心の底に祈念して、鎗矢を取つてつがひ、しばしかためて、ひやうど射る。手こたへして、ふつと立つ。やがて矢立ちながら南の小庭にどうど落つ。早太、つつと寄り、とつて押さへ、五刀こそ刺したりけれ。そのとき、上下の人々、手々に火を出だし、これを御覧しけるに、かしらは猿、むくろは狸、尾は蛇、足、手は虎のすがたなり。鳴く声は、鶴にぞ似たりける。「五海女」といふものなり。

ここからが、歌物語になります。文武両道の点では、頼政は、平忠度に負けてはいません。ただ、絡んだのが、「和歌の道に堪えず」と自称していた藤原頼長（保元の乱の張本人）であったのが、頼政の不運。有名な藤原俊成が絡まなかったところが、目立たなかった理由ですね。

主上、御感のあまりに、「獅子王」といふ御剣を頼政に下し賜はる。頼長の左府これを賜はり次いで、頼政に賜はるとて、ころは卯月のはじめのことなりければ、雲居にはとどぎす、二声、三声おとつれて過ぎけるに、頼長の左府、

ほととぎす雲居に名をやあぐるらん

と仰せかけられたりければ、頼政、右の膝をつき、左の袖をひろげて、月をそば目につけ、弓わきばさみて、弓張り月のいるにまかせて

とつかまつりて、御剣を賜はつてぞ出でにける。「弓矢の道に長ぜるのみならず、歌道もすぐれたりける」と、君も臣も感ぜらる。さてこの変化のものをば、うつほ舟に入れて流されけるとぞ聞こえし。

引用の最後「うつほ舟に入れて流されけるとぞ聞こえし」を典拠にして、能『鶴』の詞章が作られています。

浮き沈む涙の波のうつほ舟、こがれて堪へぬいにしへを、忍び果つべき隙ぞなき。

近衛帝〔在位一一四一～一一五五〕のときの化け物「五海女」は、声が鶴に似た怪獣ですが、後に二条帝〔在位一一五八～一一六五〕のときに、頼政は、怪鳥の鶴も退治したと伝えられています。

ここで疑問。鶴というのは、一体何なのでしょうか？ 寺島良安著『和漢三才図会』巻第四十四(一一七二)年の自序、島田勇雄他訳注『和漢三才図会』6、東洋文庫四六六、平凡社、一九八七の「山禽類の分類」に「鶴」の項があり、「音は」「こつ」。俗に鶴と書く。和名は沼江。『和名抄』(羽族第三三)に、『唐韻』を引用して、鶴は怪鳥である、とある。思つに一般にあるいは鶴の字を用いる。この鳥は昼は隠れ夜になると出てくる。それで鶴と

思つに、現今、鶴と称しているものは怪鳥ではなく、

洛東や各地の深山に多くいる。大きさは鳩ぐらいで黄赤色に黒影がある。鴨に似ていて昼は隠れ夜に出てきて木の梢でなく。鶯の上は黒く下は黄色である。鳴くときは尻の穴を呼応させて、すほめたり、緩めたりする。休戯といつて鳴く。脚は黄赤色である。

と説明したあと、近衛帝のときの頼政の鶴退治の話を用いています。結局は、鶴の正体ははつきりしませんが、駒札の意を尊重して、文章を直すとすれば、「鶴とは、頭が猿、尾が蛇、手足が虎、鳴く声は鶯に似た怪獣」とするのが妥当かともおもいます。こうすれば、大威張りで、「五海女」と「鶴」とを同一視することができます。一方で、想像力のないわたしが考えるに、夜行性のムササビかモモンガを見誤ったのではないかとおもいます。夢のないはなしですが、ちなみにムササビは「グルルルル……」と鳴くそうです。

ところで、『都名所図会』では、「神明宮」の頂の直前に、「四條立賣」の頂があり、

四條通東洞院東をいふ。むかし大内裏の時、此所諸品を商ぶ市場なり。今毎朝高倉四條の北に野草の市あり。往古の餘風歟。

と記されています。その名残は、「立売西町」、「立売中之町」、「立売東町」という町名にも残されています。ここは、今も商業地域で、百貨店や老舗が立ち並んでいます。高倉四條の北、大丸京都

店の東壁面には、「四條東洞院内裏跡」の表示札が貼ってあります。近衛天皇の里内裏で、「むかし大内裏の時」の大内裏跡。源頼政の最初の鶴退治の舞台です。

洛央小学校と豊園水

仏光寺東洞院の東北の角に、町名看板「佛光寺通東洞院東入（扇酒屋町）」②があります。残念ながら、大礼服の商標と町名部分が切り取られています。気をつけてみると、町名の「扇」がかすかに読めます。多分、「扇酒屋町」と書いてあつたはず。



佛光寺通 東洞院 東入（扇酒屋町）②

仏光寺東洞院から東に入ったところ、仏光寺通を挟んで、仏光寺の北向かいに、洛央小学校があります。ここは、もとは豊園小学校・幼稚園の敷地。平成四年に、豊園・開智・有隣・修徳・格別の小学校が統合して、洛央小学校として開校したものです。平成七年に建てられた豊園小学校の碑が洛央小学校の前にあります。それによれば、

明治二年六月八日、進取の気風あふれる町衆の力によ

りわが国最初の小学校のひとつである下京第十番組小学校としてこの地に開校。以来百二十有余年にわたり本市小学校教育の範となる豊園教育を推進。八千余名の卒業生を世に送り出した。平成四年三月、二十一世紀への人づくりを希求する学区民総意に基づき他の四校とともに新統合 洛央に使命を引き継ぎ輝かしい歴史に幕を閉じた。

開校して十五年余、明治維新の際変革されて以来の教育現場の変革が、吉と出てほしいものですね。

洛央小学校には、豊園水という井戸があります。元の豊園小学校の校名の由来になった井戸で、豊臣秀吉の別邸「竜臥城」のなかにあり、茶の湯の水として好んで使ったと伝えられています。京都市による駒札には、次のように記されています。

豊園水

天正十五年（一五八七年）豊臣秀吉は政庁を二条の妙顕寺から新造して聚楽第に移し聚楽第を中核として京都の城下町への改造に着手した。秀吉は聚楽第に続いて五条坊門高倉に別荘龍臥城を造営したが、その邸内の井戸より湧出する上質の水を豊園水と名づけ茶の湯に用いた。元豊園小学校の校名はこの豊園水にちなんでつけられたものである。現在の豊園水は明治三十一年に学区内に人々によって修理され保存されたもので、井戸枠から当時を偲ぶことができる。

阪急電車が四条大宮から四条河原町まで延びたときの地下鉄工事

(完成は昭和三十八年(一九六三年))で井戸が涸れ、井戸枠のみが残っていました。平成十九年(二〇〇七年)一月に、井戸を掘りなおし、京セラから贈られた太陽光発電システムで汲み上げる方式で、豊園水を復活させました。この水を導いて流路(ピオトープ)を作り、「洛央かもがわ」と名づけて、自然を大切にすることを一環としています。五月に「茶の湯の名水『豊園水』」復活記念『洛央大茶会』を開催。保護者児童による薄茶の接待のほか、煎茶道の方円流によってお手前の奉仕があったそうです。

仏光寺

仏光寺の山号は、「汁谷山^{じゆくく}」。この寺が、もともとは、汁谷^{じよたに}(または渋谷^{しぶたに})の地(方広寺、豊国神社、京都国立博物館のあるあたり)にあったことによります。真宗仏光寺派(固有名詞としては佛光寺ですが、簡略字にしておきます)。一時は、本願寺を凌ぐほどの隆盛を誇りましたが、十四世の住職を継ぐべき経豪^{けいごう}上人が山科本願寺の蓮如^{れんにょ}上人についたため、寺僧や門徒の多くもこれに従いました。従わなかった六坊の寺僧は、弟の経誉^{けいよ}上人を住職に立て、十四世として仏光寺を相続させました。豊臣秀吉が方広寺の大仏を作るとき(天正十四年(一五八六年))に、代替地として現在の場所(高倉通仏光寺下ル新開町)に移りました。現在の建物は、どんどん焼(元治の兵火)のあとの再建。

『都名所図会』には、『汁谷山佛光寺』の項目があり、「五條坊門通にあり。初は興正寺と号す。宗旨は親鸞^{しんらん}聖人の弘法^{こうぼう}にして佛光寺派と称す。」と記したあと、阿弥陀堂本尊の阿弥陀如来に



仏光寺(阿弥陀堂・大師堂)



まつわる伝説、聖徳太子立像(重要文化財)などの寺宝、仏光寺の来歴について紹介しています。さらに、当時(一七八〇年頃)の仏光寺の鳥瞰図が載っており、阿弥陀堂と大師堂の配置は、現在のそれとほぼ同じに描かれています。

仏光寺は都会のご真ん中。昼時には、広い境内のこここで休憩したり弁当を広げる仕事着の人々が見られます。写真を撮ったあとで、靴を脱いで阿弥陀堂に上がり、参拝しました。いわゆる観光寺院ではありませんので、拝観料は要りませんが、心づくしとして応分のお賽銭。広い室内には、普段は人はほとんどいませんので、たいへん静か。座っていると、不信心なわたしでも厳粛な気持ちになります。参拝したときは、大師堂の修復がおわった

ところで、まだ工事の囲いがそのままになっていました。



仏光寺参道と筆の看板



仏光寺は、隠れた桜の名所といわれています。桜の時期（四月初め）には、「花まつりin佛光寺」が開催され、この界隈のライトアップとともに、普段はみられない大行寺（洛央小学校の並びの東側、重要文化財の快慶作阿弥陀如来立像がある）などの公開もおこなわれます。

仏光寺の東門から高倉通に出ますと、東の参道が延びています。そこは、真宗仏光寺派の六坊（奥坊教音院、中坊久遠院、新坊光園院（重要文化財の阿弥陀如来立像がある）、角坊昌蔵院、南坊大善院、西坊長性院）が整然と並んだ一角です。参道は、柳馬場通で突き当たります。そこから振り返って写真を撮りました。仏光寺の門と大師堂の屋根が見えます。大師堂の背後のビルディングと手前ののぼり（陶房土の子とかすかに読める）が写っていない

ければ、繁華街のすぐ近くだとは思えない風景ですね。

突き当たったところから、柳馬場通を北へ少し上がったところに、大きな筆の看板を見つけましたので、おもわず写真に撮りました。この看板の松楳園（柳馬場通仏光寺下ル万里小路町）が取り扱うのは、文房四宝（筆、硯、墨、紙）。町名の「万里小路町」は、平安京の時代に柳馬場通が万里小路と呼ばれた名残。



綾小路通 柳馬場 東入（相之町）③



綾小路通 柳馬場 東入 塩屋町 ④

柳馬場通を北上、綾小路通に戻ると四辻近くに、「綾小路通柳馬場東入（相之町）」③の町名看板。残念ながら、町名以下が切れています。この看板のすぐ東に、「綾小路通柳馬場東入塩屋町」④の町名看板があります。基準が同じ十字路で、町名の同じ看板もあることにはありますが、ここでは、③と④間に相之町と塩屋町の境界がありますので、町名看板③の町名を「相之

町」と補つことにします。

円山応挙宅址

綾小路通を西へ戻つて、堺町通との十字路を越えたところに町名看板「綾小路通高倉東入高材木町」⑤があります。



綾小路通高倉東入高材木町 ⑤

堺町通を北上すると、箸専門の老舗、市原平兵衛商店(堺町通四条下ル小石町)があります。細かいものでもつまみやすい竹箸は、竹箸にも各種あり、煤竹の箸は、わたしのようないくつかの貧乏人が普段使うにはもったいないような気がします。

堺町四条の交差点を東へ。四条通南側のビルの地下へ降りる階段脇に「圓山應舉宅址」の碑が建っています。円山応挙(一七三三〜一七九五)は、狩野派を学んだのち、宋元画の技法に遠近法を加えて、写実を重視した円山派を興しました。

本シリーズの第9回で、『平安人物誌』の中に、与謝蕪村が画家として載っていることを述べましたが、同時代の画家円山応挙ももちろん載っています。明和五年(一七六八年)版と安永四年(一七七五年)版の住所は、「四条麩屋町東入丁」ですが、天

明二年(一七七八二年)版では、この碑のある場所に移っていることがわかります。

藤 應舉

字仲選号傳齋
四条堺町東入町

圓山主水



プロフィール

藤田眞作(ふじたしんさく)。一九四四年(昭和十九年)北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム(株)足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかわらわら菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所(<http://xyntex.com>)を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」(第10回) 2008/02/19
© 2007, 2008 藤田眞作 <http://xyntex.com>